

百間川分流部の改築に向けた今後の取り組み

分流部改築の概要



分流部の治水の仕組みの継承、歴史的遺構の保全

一の荒手と二の荒手は、江戸時代の建設当時の位置に現存しています。一の荒手、二の荒手とも、これまでに幾度となく洪水により被災し、その都度復旧されてきたため、細部の形状や構造、石材は一部変化していますが、今もなお、洪水時には旭川の水を百間川に分流する役目を果たしています。

この分流部の改築は、以下の特徴があります。

改修の特徴

1

- 長年の改修により完成した、百間川的能力を活かし、両沿川の安全度を高める。
- 荒手構造を維持し、百間川の水位が急激に上昇することを防ぐ。

歴史的な特徴

2

- 江戸中期に造られた現存する石積みの治水施設であり、全国的にもめずらしい「河川構造物」としての「巻石」構造。
- 岡山の発展及び旭川の治水の原形を築いた「津田永忠」により造られた「仕組み」及び「構造物」であること。

最新技術との融合

3

- 最新の解析技術、長年の模型実験により、計画の分派が可能な全体構造の決定。
- 構造物（石積）保全技術の活用により、過去の資産を有効活用。

百間川分流部の改築にあたっては、治水上の安全度を確保した上で、この仕組みを継承し、歴史的な価値を後世に永く語り継げるよう、学識経験者や地域住民の方々のご意見を踏まえ改築を進めます。

～安全安心な川づくりと歴史的遺構の保全に向けて～

百間川分流部の概要

概要

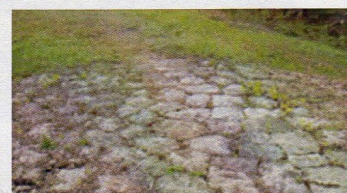
- 旭川放水路（百間川）は、江戸時代に造られた放水路を活用し、国により昭和40年代より河川改修を進めています。
- 百間川への洪水の分流は、現在も当時と同様の位置と言われており、その機能と施設を極力引き継いだ形で改修を進める予定です。



二の荒手



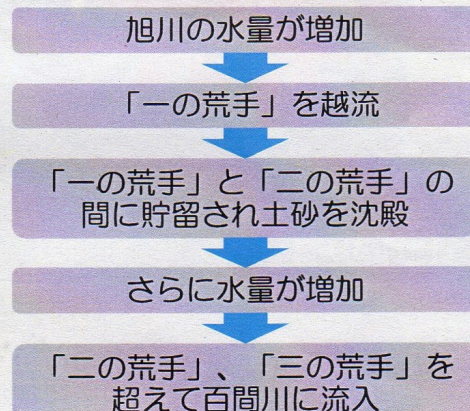
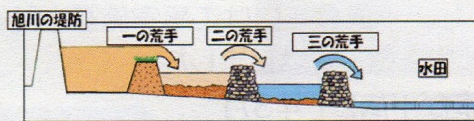
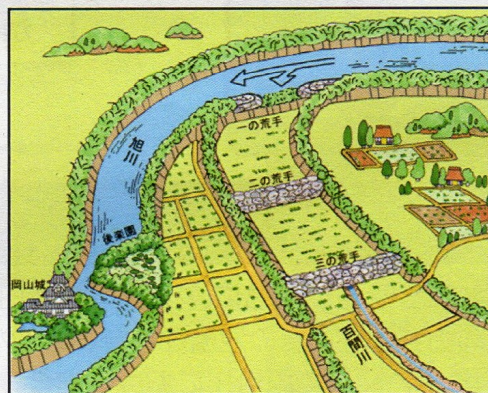
一の荒手下流巻石部（亀の甲）



一の荒手上流巻石部（亀の甲）

分流部三段の荒手のしくみ

- 江戸時代に岡山城下の洪水被害軽減等を目的に熊沢蕃山が越流堤防により流水を東南へ吐かす「川除けの法」を考案しました。
- その後、貞享3年(1686年)、津田永忠により堤や荒手を備えた放水路が築造され、一定量を越えた旭川の水が荒手堤を越えて百間川側へ分流することで、城下を洪水から守る仕組みを実現させました。
- 三段（3ヶ所）の荒手により水勢を弱めながら旭川の洪水を下流に越流・放水させます。
- 二の荒手、三の荒手は洪水時の土砂溜め機能を有していました。（三の荒手は明治25年洪水で流出し現存しません。）



【荒手の効果】

- ・ 洪水の流れる速度を抑制
- ・ 砂の流出を抑制

歴史的遺構

一の荒手、二の荒手は、江戸時代に百間川と合わせて築造された貴重な歴史的遺構であり、二の荒手は埋蔵文化財として、発掘調査等も行われています。

これらの分流部の歴史的遺構は、学識者や地域住民等で構成される協議会において、保全活用の提言が出されています。

